創立50周年記念論文集の発刊にあたって

外国語学部長　湯　浅　康　正

名古屋学院大学が「敬神愛人」を建学の精神として東区大幸町に開学されてから，今年で50周年を迎える。まずは開学の礎となられた方々，今日まで本学の持続と展開を支えてくださった内外の方々に感謝申し上げたい。本学は開校4年目にして深刻な財政危機に見舞われ，一時は存立そのものを危うくしながら，その克服に15年を要した。中堅の大学として地域に根付き，将来の飛躍を期している現在，この過去を回顧すると，感無量のものがある。

この50年の間に大学を取巻く社会の状況，知の環境は大きく様変わりした。大学が開設された1960年代は反戦，平和，民主主義，人格完成のための教養といった戦後的価値観が色濃く残っていた。しかし，70年代，80年代に価値観の古典的な枠組みが解体し，大衆社会化状況，消費資本主義の経済が出現した。90年代になると，情報化，グローバル化の大波が押し寄せ，変化の激しい，先の見えにくい時代となって現在に至っている。

学校基本調査によれば，本学が開学した1964年には全国の4年制大学の数が291校，進学率がわずかに15.5％だったが，昨年2013年は782校，進学率49.9％になっている。大学の役割も自ずから多様なものに変わった。一部選良の教育・研究の場であったものが，研究を重点とする大学院大学と，教育を重点とする大学の二極に，大きくは分化した。本学が21世紀に入ってから教育に軸足をおいた大学として自覚的な歩みを進めてきたことは周知の通りである。

しかしどのような時代，どのような性質の大学にあっても，研究活動が営為の中核にあることはいうまでもない。教育の場で近頃の課題となっている主体的学修，アクティブ・ラーニングも，学問的認識の生まれる場を日々体験し，立ち会っている教員がサポートすることで初めて可能になる。

本学はすでに開学準備の段階から，開学準備委員会が研究論集の編集を始め，開校3ヶ月にして早くも，論文20篇からなる『名古屋学院大学論集』創刊号を刊行するという非凡な取り組みをしている。その年の11月には研究機関として「産業科学研究所」を設立するなど，研究重視の姿勢を強く打ち出し，苦難の時代にあってもこの姿勢をいささかも崩すことなく保持してきた。当初の『名古屋学院大学論集』がその後「社会科学篇」「人文・自然科学篇」「言語・文化篇」，「医学・健康科学・スポーツ科学篇」と4つの篇に分かれ，『研究年報』とあわせて現在5種類の紀要が発行されているのは，そのことを物語る一端である。

本学における研究活動のますますの充実，興隆を願ってやまない。